特別寄稿

コートールド美術館展と愛の無情

榎本　眞理子

資本主義の終焉、「未来への大分岐」の時代。それが今である。ホモサピエンスのサバイバルを可能にした重要な要素の一つ、共感能力がヒトのうちで衰えつつあるのは、一握りの人間が世界の富の殆どを占有していることからも明らかである。エマニュエル・トッドはそれを「狂気」と呼んだ。

そんな時代を予見して警鐘をならすかのように、マードックの『ジャクソンのディレンマ』のジャクソンは西洋近代の知とは無縁の、癒しを与える存在である。これはつとに平井杏子氏が指摘している通りであるが、その原型は案外『鐘』のドーラあたりかも知れない。

冷え込んだ秋のある日、コートールド美術館展に出かけた。ドーラがどんな絵を見ていたのか知りたかったのである。当時評価の高くなかった後期印象派の絵をいくつも購入したコートールドは大した人だったのだろう。ロジャー・フライのポスターと手紙の展示も興味深かった。

今回発見したことの一つは小型版『草上の昼食』（習作）が、オルセーのものに比べてあっさりした塗りであること、もう一つは『フォリー＝ベルジェールのバー』のカウンターにバスペールエールが2本も並んでいることだ。バスペールエールの瓶には赤い三角形が描かれている。三角形と言えばセザンヌの山を思い出すが、三角など幾何学的な形状についての記述はウルフの『波』にも出てくる。そしてウルフとロジャー・フライは極めて親交が深かった。

話は変わるが、英文学の卒論指導をしていると数年に一人ずつ『十二夜』にはまる学生がいた。ヴァイオラの男装した人物・シザーリオにほれ込んだオリヴィアは彼女の双子の兄セバスチャンをシザーリオと思い込み、結婚するのである。いくら姿かたちが瓜二つ（二卵性には珍しい）とはいえ、別人である。このように恋する相手があっさり変わることはシェイクスピア作品のあちこちに見られる。この点マードックも共通なのが面白い。このことは、実は恋愛の本質と深い関係があるのではないか。2017年、フィオナさんの研究発表の司会をしていてそんな考えがひらめいた。恋愛とは相手がその人であることに執着することであり、その愛の相手が変わる、或いは死んだからと言って代わりを見つけるのは、おかしな話である。だが愛とは相手の存在に恋い焦がれ、自らがその人になりたいと希求することでもある。とすればそこでは恐らく個別性は影をひそめることだろう。恋の相手の個別性への限りない執着と、個別性を超えた地平に現れる対象の真髄への無限の憧れと。その相反する二面性を兼ね備えている、

それが「真の恋」というものだろう。もっとも、恋に本物だの偽物だのというのは野暮の骨頂かもしれないが。

個別性への憧れと、相手の中に垣間見えるイデア的な善＝美への渇望との同時存在。とすれば恋とはもともと内部に大きな矛盾を孕まざるを得ないものであり、時々刻々広がりゆく亀裂に耐えて瞬間の充実を求める、そういうものなのであり、それを描いたのがシェイクスピアであり、マードックであり、紫式部なのではないだろうか。

「イデアの世界近くに留まる人びとは、愛する人のうちに肉体の美のみならず魂の美も見ることが出来る」と「愛とビジョン―マードックのエロスと個別性」（*Iris Murdoch and the Search for Human Goodness* 所収）の中でナスバウムは言う。これが恋愛における「天にも昇る心地」の正体であり、ここでも個別性と普遍性の同時存在が見られる。

愛はイデア的には光輝くものであっても、現実世界に落とし込めば怜悧な刃物のように人を刺して止まない。それでも、いやそれだからこそ人は恋愛に憧れるのだろう。過ぎ去りゆく瞬間の中で、生きている実感をひりひりと生身に刻み付ける何かが襲ってくるのを耐え忍ぶ、恋とはそういう体験であるのだから。

それはある程度まで若さ―いくつになっても「私は心は若い」などと言いたがる人もいるので、実年齢かどうかは問わない―の特権であり、一方年を取ることの快楽は、上述のようなことを恥ずかしげもなく語れることであろう。